

許容された不義密通

——凌濛初「二拍」を中心に

はじめに

明清時代は節烈を尊ぶ風氣がこれまでになく高まった時代であり、特に既婚女性の場合には夫に貞節を貫くことが當然とされていたといわれる。ところが明末の文人凌濛初の短編白話小説集「二拍」こと『拍案驚奇』（一名『初刻拍案驚奇』、以下『初刻』とする）及び『二刻拍案驚奇』（以下『二刻』とする）の中にはそうした世相と矛盾するよう見える物語がある。『初刻』巻二「姚滴珠避羞惹羞 鄭月娥將錯就錯」の主人公「姚滴珠」は、夫の不在中に、女衞の口車に乗つてとある商人の妾として圍われるようになる。後に救い出されるも相手を最後までかばい通して逃がし、自らは何事もなかったかのように夫のもとへ歸る。夫に對して背信行爲を働いた女性が何の處罰も受けないというのは、些か不自然ではないだろうか。

また『二刻』巻三十八「兩錯認莫大姐私奔 再成交楊二郎正本」の結末も同様の不自然さを感じさせる。主人公「莫大姐」は夫のことなど眼中になく不義密通の相手に夢中な女性である。それにもかかわらず、紆餘曲折の末最終的に密通相手と正式に結婚するという幕引きを

迎えるのである。

この姚滴珠、或いは莫大姐の不可解な結末についてはこれまでも指摘があり、明末清初の男性の貞操觀念の緩み^②、封建的禮教や父母の命によつて婚姻が決められるという婚姻制度への反抗^③、男女平等や女性の情欲の肯定などの産物とされているが、例外的な傾向をもつ作品が存在することを指摘するにとどまっているように思われる。

凌濛初はさまざまな悪事を作品に描いており、馮夢龍が「三言」の編纂にあたつて倫理的な作品を好んだのとは異なり、悪事を働いても無事に過ぐす人間が實在するという現實に抗うことなくその「奇」を描くことを優先したのだと指摘される^④。一方で、凌濛初の「二拍」にも勸善懲惡の傾向は強く認められ、馮夢龍が忠孝節義といった大道を好んだのに對して、より普遍的に存在する悪事に對して善惡の判斷を下して世の人々を教化しようとする姿勢が見られるという見方もある^⑤。この二つの姿勢は一見矛盾するようにも見えるが、世間一般に悪事とみなされるようなことであつても、それを糾弾して讀者を教化すべきかどうかは自らの倫理觀によつて判斷していたのだと理解することが可能ではないか。

笠見彌生

つまり凌濛初にとつて、姚滴珠や莫大姐の不義密通は許容できる範疇にある行爲だつたのではないだろうか。この二つの物語はいずれももつた話の明らかなでなく、凌濛初自身の創作であつた可能性が高い。凌濛初の創作態度や倫理観を考える上で重要な作品といつてよいだろう。そこで本論ではこの「姚滴珠」と「莫大姐」という二人の女性の不義密通をなぜ許容されているように描いたのかを物語の分析を通して検討したい。⁽⁸⁾

一、許容された不義密通

通常、白話小説に登場する淫婦には、『金瓶梅』の潘金蓮に代表されるようにそれ相應の不幸な結末が待ち受けている。特に『水滸傳』や『水滸劇』では、好漢によつて殘虐な方法で殺害される淫婦が少なからず登場する。⁽⁹⁾ 同様の傾向は「二拍」や先行する短篇白話小説集「三言」にも認められ、婚姻が實質的に賣買婚となつていたため、正式な結婚以外の男女の私通は道徳的にも法律的にも悪とされたという現實が反映されているという。⁽¹⁰⁾ 現實の社會においても貞節であるか否かは善悪を示す標識であつた。清代末期に至つても、實際の裁判で貞節がらみの重大事件を扱う際、上級審への報告の合理性を高めるために當事者となつた女性たちを貞節・淫蕩のいずれかに分類し、それを強調して記録する傾向があつたことが指摘されている。⁽¹¹⁾ こうした狀況を考えると、「姚滴珠」と「莫大姐」が幸せな結末を迎えるのは不自然なことと言わざるを得まい。

たしかに、女性に貞節を求める風潮が高まると同時にその概念は多様化し、従來の範疇から大きく逸脱した女性が節婦烈女に數えられるようになった。⁽¹²⁾ たとえば『醒世恆言』卷三十六「蔡瑞虹忍辱報仇」

では貞節を守れなかつた女性「蔡瑞虹」を肯定的に描く。それは彼女が仇討ちという父への孝を自らの貞節よりも重視した結果不貞に至つたからであり、「貞節」が「孝」の下に位置づけられた社會の側面が反映されたものであるという。⁽¹³⁾

しかし「姚滴珠」と「莫大姐」の場合、二人ともむしろ積極的に不義密通に走つていて、行動の面でも心情の面でも、夫に對して貞節を貫く節婦烈女の要素を見出すことは困難である。なぜ彼女たちに團圓が用意されているのであろうか。

まずは彼女たちの不義密通の過程をそれぞれの物語の梗概とともに確認しておこう。

(一)「姚滴珠」

『初刻』卷二「姚滴珠避羞惹羞 鄭月娥將錯就錯」の主人公「姚滴珠」は、萬曆年間、徽州府休寧縣孫田郷の富貴な家庭で育ち、十六歳で結婚する。兩親が仲人口に騙されたせいで屯溪にある没落家庭の潘甲に嫁いだが、夫潘甲との仲はきわめて良好であつた。しかし夫は舅の命により新婚二ヶ月で出稼ぎに出てしまい、残された姚滴珠は舅姑と三人で暮らすことになる。甘やかされて育つた姚滴珠と貧乏な家の舅姑は折り合いが悪く、罵詈雑言に耐えきれなくなつた姚滴珠は、實家に歸ろうと密かに家を出た。

實家へ戻る途中、姚滴珠はごろつきの汪錫に出くわし、騙されて誘拐されるも居心地のよさに居ついてしまう。擧句商人吳大郎に妾になることを勧められると、ひと目で吳大郎を氣に入つて承諾し、妾としての生活を二年の間楽しんでた。

その頃、姚滴珠が實家に匿われているとする舅姑と、舅姑にいびり殺されたと疑う實家との間で裁判が起こつていた。ある日浙江衢州の

花街で姚滴珠をつくりの妓女を見かけたという情報が寄せられ、兄が探し行くと鄭月娥という瓜二つの別人だった。しかし兄は鄭月娥を身代わりに連れて行くことにして、深い仲になってしまう。

ところが裁判の場では夫潘甲に別人であると見破られ、知縣の策略によって本物の姚滴珠も見つけ出された。裁きの場に出された姚滴珠は汪錫の悪事の一部始終を訴えたが、吳大郎については名前を知らないとかばい通した。結果、汪錫が叩き刑に處されて死んだのに対し、吳大郎は自身が賄賂等をばらまいた効果もあって何も懲罰を受けず、姚滴珠は元通り夫のもとへ歸った。兄と鄭月娥は一度は引き離され、兄は從軍、鄭月娥は官賣に付されたが、兩親が鄭月娥を買い取つて妻として付き添わせ、後に恩赦を得ると二人で故郷に戻つて暮らした。

この作品は入話・正文とも瓜二つの顔の女が起こした事件を描いていて、物語の中心は不義密通そのものよりも奇妙な事件の展開にある。そして、その展開は因果應報の法則に貫かれており、登場人物たちはそれぞれ相應の結末を迎えている。姚滴珠を引き込んだ汪錫は刑死する。兄と鄭月娥は最終的には結ばれるものの裁判を攪亂した罪を問われて一度は處罰を受けている。彼女が家を出るきっかけを作った舅姑と、彼女を妾にした商人吳大郎は報いを免れているが、それも合理的な結末に見える。舅姑はたしかに姚滴珠にとつてよい人間ではなかったものの、「滴珠は生まれてこの方父母のそばで珠玉のように扱われていましたから、こんな物言いを聞いたことがありませんか。言い返すこともできず、ただ我慢して、陰でめそめそ泣いて終わりでした（滴珠生來在父母身邊如珠似玉、何會聽得這般聲氣？不敢回言、只得忍着氣、背地哽哽咽咽、哭了一會罷了）」という語りが示すように、貧乏な家の舅

姑と金持ちの家で甘やかされて育つた若い嫁の反りが合わなかつただけである。吳大郎にしても、きちんと對價を支拂つて女衞の紹介する女を妾として圍つたに過ぎず、姚滴珠もその金子の一部を受け取つているし、罪を逃れるために賄賂を配つたという理由付けもされている。しかし姚滴珠の場合はそうではない。最初は騙されて連れてこられたとはいえず、吳大郎に完全に心奪われて妾になることを承諾し、夫のことなど思い出しもせずに二年もの間妾として過ごした上、裁きの場に出されても吳大郎のことをかばい通した。夫への貞節よりも、吳大郎への愛情を優先したといつてもよい。にもかかわらず、作者は彼女に裏切りの報いを與えようとせず、元通り夫のもとへ歸るといふ團圓を用意しているのである。

(二)「莫大姐」

『二刻』卷三十八「兩錯認莫大姐私奔 再成交楊二郎正本」は北直隸張家灣の人で役所の使用人をしている男、徐徳の妻「莫大姐」を主人公とする。彼女は多情な性質で、酔うと男にちよつかいを出すような女性であつた。特に隣人楊二郎と深い仲になり、徐徳が仕事で長期間歸らないのをいいことに、夫婦同然の生活をしてはばかりなことがなかつた。ところが徐徳が家にいることが増えると徐徳にも露見してたしなめられたため、遂に楊二郎と驅け落ちの約束をして時機が來るのを待つていた。

しかし徐徳が家にいてなかなか驅け落ちを實行できず、憂さ晴らしに外出したために、親戚の郁盛の畏にはめられてしまう。郁盛はやたらと良家の婦女をたぶらかしている男で、莫大姐に片思いをして待ち伏せしていたのである。郁盛は莫大姐を酒に酔わせて事に及ぶ。酔いつぶれた莫大姐は相手を楊二郎と思い込み驅け落ちの手はずまでもら

してしまつたため、郁盛はそれを利用して楊二郎になりすまし、莫大姐と駆け落ちした。莫大姐は間違いに氣づいたものの、家を出てしまつた以上もはや引き返すこともできず、郁盛とともに臨清に向かつて妻の出走に氣づいた夫の徐徳は、楊二郎が匿っているにちがいないと決めつけて訴え出る。楊二郎は無實を訴えたが信じてもらえず、無實の罪で捕らえられてしまつた。

一方、莫大姐は楊二郎を思いながらも、仕方なく郁盛と淫逸な日々を送つていた。ところが二ヶ月が経つと郁盛は心變わりし、莫大姐の持つてきた金を奪つた上で妓樓に賣り飛ばして家に歸つてしまつた。莫大姐は泣く泣く妓樓で身を鬻ぎ、四、五年が過ぎた。

ある時客としてかつての隣人が訪れたため、莫大姐はこの成り行きを訴えて出るように頼んだ。その結果郁盛は捕らえられ、莫大姐も助け出された。郁盛は叩き刑の上従軍させられたが、楊二郎は冤罪だつたといえ他人の妻に手を出したかどで杖罪に處された後家に返された。莫大姐は元の夫徐徳の元へ返されたが、夫は「私の妻は私を裏切つて何年も逃げていた上、娼家にまで身を沈めていました。私がこのあはずれをほしがつてどうするのです？役所で離縁して、誰か別の人に嫁がせていただきたく存じます。（小人妻子背了小人逃出了幾年、又落在娼家了。小人還要這濫淫婦做甚麼？情願當官休了、等他別嫁個人罷。）」と離縁を申し出る。最終的には無實の罪を着せた負い目もあり、周囲の勧めに従つて楊二郎と正式に結婚させた。

姚滴珠の場合は新婚の箱入り娘が一時の迷いから不義密通に陥るといふ話だが、莫大姐は夫の目を盗んで不義密通を重ねている女性である。物語の冒頭から酒を飲んで男を誘惑する多情な女性であることが示されており、その淫蕩なさまは姚滴珠の比ではない。しかし彼女

にも、愛想をつかした夫に離縁されたことで一途に思い續けた不義密通の相手と結婚することになるといふ團圓が用意されている。淫蕩な女性が不義密通を貫いた擧句、その相手との幸せを手に入れているのである。

共通点が見出させるのは結末だけではない。まず、この作品も不義密通そのものを描くことが目的ではない。入話、正文ともに奸夫との駆け落ちにからむ冤罪を描き、冤罪をはらしていく裁きの紆餘曲折に主眼がおかれている。そしてこの物語でも登場人物にはそれぞれ相應の結末が用意されており、主要登場人物はもろんのこと、莫大姐を買い取つた妓樓の女將のような脇役に至るまで「魏女將が良民を買つたことは、事情を知らなかつたのだから、罪にはあたらなとし、身價を拂つているので、賣色で數年の利益を得ているが、返還する必要はない（魏媽買良、係不知情、問個不應罪名、出過身價、有幾年賣姦得利不必償還）」と結末とその理由が記されている。

語り手も折に觸れて因果應報の展開であることを述べる。楊二郎が無實の罪で捕らえられた際には「これもまた楊二郎が人の妻に手を出したことで受けねばならない報いである（此亦是楊二郎淫人妻女應受的果報）」といい、莫大姐が妓樓に賣り飛ばされた際にも「これもまた莫大姐が婦女として正しい行いをしようとしなかつたことで受けねばならない報いである（此亦是莫大姐做婦女不學好應受的果報）」というように、因果應報の論理で構成された物語であることが強調されている。しかし彼らの罪はこれで帳消しになつてしまふ。たしかに莫大姐は意に染まぬ相手との暮らしを強いられたり、妓樓に賣り飛ばされたりと辛酸をなめ、擧句夫にも離縁されてしまふ。しかし最後には心に思い續けた楊二郎と結ばれて幸せな暮らしを手に入れているのであり、

むしろ紆餘曲折を経て長年の願いが叶ったといつてもよい。彼女をかどわかした郁盛が叩き刑の上従軍させられるという罰を與えられて終わるのは對照的である。

以上のように姚滴珠と莫大姐の物語は、いずれもそれぞれの登場人物が因果應報の理になつた結末を迎えているにもかかわらず、彼女たちの不義密通、夫への裏切りは許されて終わる。つまり、不自然に見える彼女たちの結末も、作者にとつては妥當なものだつたと考えるべきであろう。

二、男性主觀の視點

姚滴珠と莫大姐雙方の不義密通の描寫を比べると、彼女たちの不義密通が許される理由をうかがわせるいくつかの共通點を見出すことができる。

第一に、語り手は男性の視點に立つて意見を述べており、女性の行動よりも男性の行動を律することに重點をおいているように見える。どちらの物語も妻の不義密通を描くが、語り手はむしろ妻を一人家に残して出かけた男たちをとがめるような口ぶりである。

姚滴珠の場合、新婚二ヶ月で夫が出稼ぎに出てしまい、そのためにその合わない舅姑と三人での暮らしを強いられ、ついに家を出て誘拐されるに至る。姚滴珠はごろつきの一味の女と次のような會話を交わしている。

婆子就道「官人幾時回家？」滴珠又垂淚道「做親兩月就罵着逼出去了、知他幾時回來、沒個定期。」婆子道「好沒天理！花枝般一個娘子、叫他獨守、又要罵他。……」
婆さんは言った。「旦那様はいつお戻りです？」滴珠はまた涙を

流して「結婚して二ヶ月で怒られて無理やり出かけさせられたのだから、いつ歸ってくるかなんて、豫定はありません。」と言つた。婆さんは言つた。「なんて天理に悖ることでしょう！花のようなお嬢さんに、一人で留守居させておいて、更に叱りつけるだなんて。……」

姚滴珠は夫の不在を嘆き、夫が歸るまで實家に戻ると言つている。逆に言えば、夫が長期的に家を空けなければ家を出ることもなく、不義密通に走ることもなかつたはずなのである。作者はこのように夫の不在を姚滴珠の嘆きにも織り交ぜ、その不在がどれだけ大きな原因であるかを強調している。

莫大姐の場合も、楊二郎と深い仲になつたのは夫の徐徳が長期間家を空けることが多かつたからであり、徐徳がよく家にいるようになることもなく不義密通の事實に氣づく。そのことは次のように記されている。

徐徳在衙門裡走動、常有個月期程不在家裡、楊二郎一發便當、竟像夫妻一般過日。後來徐徳掙得家事從容了、衙門中尋了替身、不消得日日出去。每有時節歇息在家裡、漸漸把楊二郎與莫大姐光景看了些出來。

徐徳は役所で働いていたので、一月以上家にいないことがあり、楊二郎にとつてはますます好都合で、まるで夫婦同然の日々を過ごしていた。あとになって徐徳は生計に餘裕が出てきたので、役所には身代わりを見つけ、毎日でかける必要がなくなつた。時間があるたびに家で休んでいると、だんだんと楊二郎と莫大姐のことに感づいてきた。

莫大姐は夫の徐徳が家にいないからこそ大つぴらに楊二郎と情を通じ

て、深みにはまったのである。更にこのあと莫大姐は夫が再び家を出た時を利用して楊二郎と駆け落ちの相談をし、更には「北方の風俗では、女性が出かける時には、自分で出かけ、男性は自分のことがあるので、あまりついて行こうとはしない（北方風俗、女人出去、只是自行、男子自有勾當、不大肯跟隨走的）」ため、夫の許可を得て女たちだけで外出したことから郁盛の罫にかかる。作者は莫大姐が道を踏み外していく行動一つ一つについて、夫が目を離していたからこそその展開であることを明示しているのである。

夫の長期不在中に妻が不義密通に走るといふ設定は、他でもよく使われている。たとえば『初刻』巻六「酒下酒趙尼媼迷花 機中機賈秀才報怨」では入話、正文ともに尼の手引きで不義に引き込まれる妻を描いたものだが、いずれにおいてもその夫は家を空けている。

『二刻』巻三十四「任君用恣樂深閨 楊太尉戲宮館客」の冒頭では「男女の大欲が、互いに同じものだとはどうして知ろうか。……だから閨房の中は恨み言と醜聞に満ちているのである。（豈知男女大欲、彼此一般？……所以滿閨中不是怨氣便是醜聲。）」といい、女性の情欲を満足させられないことが醜聞につながるとはつきり述べている。姚滴珠にせよ莫大姐にせよ、夫が仕事を理由に彼女たちに孤獨な生活をさせたことが不義密通の大きな原因であることが示唆されており、妻のそばを離れず寂しがらせないことが不義密通を防ぐ道でありそれが男性の責務だと、暗に讀者に訴えかけているかのようである。

一方、女性の軽はずみな行動や愚かな過ちに對しては、女性ならではの浅はかき、愚かさとして片付け、それ以上非難しようとする。姚滴珠はごろつきの汪錫に言葉巧みにかどわかされる。その場面で語り手は次のようにいう。

正是女流之輩無大見識、亦且一時無奈、拗他不過、還只道好心、隨了他來。

まったく女というものは大した見識がないもので、しかもとつきにはどうしようもなく、彼に逆らいきれず、その上ただ良かれと思つて、彼についてきたのである。

そしてその後姚滴珠は一味の女にもつと大事にしてくれる金持ちの男を紹介してやると甘い言葉で誘われると、その場で承諾しないまでも心動かされてしまう。そこでも次のようにいう。

那滴珠是受苦不過的人、況且小年紀、婦人水性、又想了夫家許多不好處、聽了這一片話、心裡動了。

この滴珠は苦勞知らず、しかも年も若く、氣持ちが水のように流れてしまうのが女の性、嫁ぎ先の嫌なことがたくさん思い浮かび、この話を聞いて、心が揺れた。

このように見知らぬ男についていってしまう浅はかき、甘い誘い文句に簡単に心揺らいでしまう弱さを描きながら、作者は彼女のことを非難するよりも、それが女の性だと受け入れているふしがある。

莫大姐の場合も同様の表現が見られる。夫が家にいるために密通相手の楊二郎と會えず鬱々としている場面で、語り手は次のようにいう。
大凡女人心一野、自然七顛八倒、如癡如呆、有頭沒腦、說着東邊、認着西邊、沒情沒緒的。

だいたい女の心は一度動揺すると、自ずと七轉八倒するもので、呆けたように上の空、頭はろくに働かず、東といいながら西を見ているという具合に、心ここにあらざつた。

また、郁盛に騙されて妓樓に連れて行かれる際に、親戚を訪ねるといふのをすつかり信じ込んでいそいそと出かける支度をする場面にも

次のようにいう。

莫大姐女眷心性、巴不得尋個頭腦外邊去走走、見說了、即便梳妝起來。

莫大姐は女の氣性というもので、外を出歩く理由を探していたので、そうするというのを聞いて、すぐに身づくろいを始めた。

このとおり莫大姐についても、彼女が密通相手のことばかり考えていることも、妓樓に賣り飛ばされることにも氣づかず外出できることを喜んでいそいそと身支度をしていることも、同じように女の性として片付け、それ以上追求したり非難したりしようとする姿勢は見受けられない。

同様の傾向は「二拍」の他の作品からも見てとれる。たとえば『二刻』卷三十五では作品冒頭で次のようにいう。

婦人短見、往往沒奈何了、便自輕生。所以縊死之事、惟婦人極多。

女は短慮で、往々にしてどうしようもなくなると、自ら命を輕んじる。だから首を吊つて死ぬのは、女が非常に多いのである。

こうして女性の愚かな行動は往々にして女性の性質によるものだと片づけられてしまうのである。

先に述べたように、姚滴珠と莫大姐の二つの物語は凌濛初の進歩的な女性觀の産物とも言われている。たしかに「二拍」の中には女性のみ貞節を要求する風潮に對して批判的な論調が見られ、男女の不平等について意識していたことがうかがえる。しかし姚滴珠や莫大姐の不義密通を夫の責任であるかのように描き、彼女たちの過ちを責めようとしないうり口を見ると、男女の不平等を積極的に是正しようとしているというよりは、女性をよく見守り管理するよう男性に呼びかけることを目的としているような印象を受ける。

これには讀者層の問題が關係しているのかもしれない。凌濛初は『初刻』凡例において、

一是編主于勸戒、故每回之中、三致意焉。觀者自得之、不能一一標出。

ひとつ、勸戒を主として編集しているので、どの話の中でもそれを何度も繰り返す。讀者が自分で讀み取ること、一つ一つ示すことはできない。

と、編集方針の主軸が勸戒にあることを示している。しかし凌濛初は小説を通して世間の人々を遍く教化しようとしていたのではなく、想定しうる讀者を念頭に置いて作品を編んだのではないだろうか。

當時の小説の主要な讀者は生員を主とした科擧の受験生や商人たちであつたと推測される。つまり、小説を讀むのは概ね男性である。そのため讀者として自然と男性を想定し、常に男性の視點から物事を律しようとする男性主觀の視點で讀者に語りかけているのであろう。女性の犯す過ちを女性ゆえの愚かさとして受け入れ、それ以上批判しようとしないうり口は、過ちを犯しやすい女性の性質を理解し、身近な女性が道を踏み外さないようによく管理するのが男性に課せられた責務だという一種の倫理觀を反映しているといつてもよい。男性に對しては教訓を述べて感化しようとする一方、女性の行動を變えていこうとする教化意識は希薄だつたようだ。

三、一途な愛情

第二の共通點は、どちらの物語においても密通相手に對する愛情が強調されていることである。しかもどちらの作品にも夫、密通相手に次ぐ第三の男が存在し、女性の一途さを際立たせている。

姚滴珠の場合、出會いの場面から吳大郎に對して次第に心惹かれていく心理が細かな動作の描寫を通して丁寧①に描かれている。そして姚滴珠は誰に強制されることもなく自ら吳大郎の妾になることを了承し、一夜を共にすると「滴珠はただ出會つたのが遅かつたことを恨めしく思うばかりだった（滴珠只恨相見之晚）」とすつかり吳大郎に夢中になる。

しかし相手が誰でもよかつたのかというとそうではないということが第三の男の存在によつて示されている。ここではごろつきの汪錫が第三の男として、姚滴珠の吳大郎に對する愛情を際立たせる役割を擔う。汪錫は姚滴珠を妾として賣り飛ばす前に自ら姚滴珠を誘惑しようとする。それに對して姚滴珠は次のように答えて斷固拒否する。

這如何使得？我是好人家兒女、你元說留我到此坐着、報我家中。

青天白日、怎地拐人來家、要行局騙？若逼得我緊、我如今眞要自盡了。

こんなことがどうしてできるんですか？私は良家の子女で、あなたは私にここに座つていたら、家に知らせてくれると言つていたでしょう。青天白日のもと、人を家にかどわかして、騙そうとするなんてどういふことですか？もしも無理矢理にとりながら、私は今本當に自害します。

その後見つけ出されて裁きの場に出たときも、吳大郎と會うきつかけを作つてくれたはずの汪錫のことは刑死に追い込み、吳大郎のことだけはかばい通している。この汪錫と吳大郎の對比によつて、姚滴珠は不義密通を働いているにもかかわらずある種の一途さをそなえた女性に見えるはずである。

莫大姐の場合は、郁盛が第三の男の役割を果たしている。莫大姐はそもそも酒に酔うと男にちよつかいを出すような女で、貞淑な妻には

程遠い。楊二郎の他にも密通の相手が存在したことが示唆されているし、第三の男の郁盛とも關係をもつてしまう。しかし作者は彼女にとつて楊二郎が特別な存在であり、一途に楊二郎を思い續けていたことを強調しようとしているように見受けられる。たとえば次の三つの記述には、全て濛濛初本人によると思われる圈點がついている。

雖是莫大姐平日也還有個把梯己人往來、總不如與楊二郎過得恩愛。莫大姐にはふだん親しく行き來している人が他にもいたけれど、どの人とも楊二郎のように愛し合つていなかった。

元來莫大姐醉得極了、但知快活異常、神思昏迷、忘其所以、眞個醉裡醒時言。又道是酒道眞性、平時心上戀戀的是楊二郎、恍恍惚惚、竟把郁盛錯認。

なんと莫大姐はこの上もなく酔つていたので、非常に心地よいこと以外わからず、頭は混亂し、何もわからなくなつて、正に酔つて普段のことを口走る、という状態になつた。しかも酒は本性を現すというもので、普段心に思っているのは楊二郎なので、朦朧として、なんと郁盛のことを取り違えていたのである。

莫大姐終久有這楊二郎在心裡、身子雖現隨着郁盛、畢竟是勉強的、終日價沒心沒想、哀聲歎氣。

莫大姐は常に楊二郎を心に思い、身は今郁盛のそばにあるけれど、やはり無理をしているのであつて、一日じゅう心ここにあらずで、悲しくため息をついていた。

しかも莫大姐の場合、夫に對する愛情も表現されず、物語全體を通して楊二郎以外の男に對する愛情は示されず、楊二郎が特別な存在であ

つたことは明らかである。

逆に夫の莫大姐に對する愛情や優しさを讀み取れる場面もない。それとは對照的に楊二郎は莫大姐に誠實である。莫大姐が發見されるまで冤罪で何年も牢に入れられていたにもかかわらず、莫大姐を正式に娶るよう打診されると、「もしそうできるなら、たとえ牢に多少餘計に入れられたとしても、そのことはもう永遠に言わない（若肯如此、便多坐了幾時、我也永不提起了）」と笑顔で答える。夫徐徳と莫大姐の間が冷え切っているのに對し、楊二郎と莫大姐は強い絆で結ばれているのである。

以上のように、姚滴珠も莫大姐も不義密通に走つて夫を裏切つた女であるが、密通相手との精神的な結びつきがみてとれる。單に情欲のために夫を裏切つたのではなく、密通相手を思う心があつてこそだといふことが示されているのである。

明末以降、姪欲や好色とは異なる、眞情を伴つた男女の戀愛を積極的に評價しようとする風潮、「情」を重視する考えが文人たちの間に急速に廣まり、「情」を基盤とする新たな貞節觀念が生まれた。姚滴珠と莫大姐が不義密通以外の悪事を犯しておらず、またその不義密通が一途な愛情を伴つたものであるため、彼女たちの不義密通は完全な罪惡にはみえなくなつていのではないだろうか。

四、貞節觀念の理想と現實

第三の共通點は、夫が不義密通に對して嚴格な處置をとらうとしないうことである。前述の通り、この作品が登場したのは貞節が過度に重んじられた時代のことであつた。當時の節婦烈女を重んじる風潮から考へて、不義密通は恥ずべきことであり、罪であつたはずである。し

かし姚滴珠と莫大姐の物語を見ると、貞節觀念の理想と現實がかなり乖離していたのではないかという疑念が生じる。

姚滴珠の夫はごろつきに騙されたとはいへ、一時別の男に妾として圍われていた妻を責めることなく妻として受け入れる。莫大姐の夫は、莫大姐が楊二郎と通じていることが近所に知れ渡つていふことを知つても彼女を離縁しようとはしない。徐徳は莫大姐を次のようにたしなめる。

徐徳一日對莫大姐道「啗辛辛苦苦了半世、掙得有碗餅吃了、也要裝些體面、不要被外人笑話便好。」莫大姐道「有甚笑話？」徐徳道「鐘不扣不鳴、鼓不打不響、欲人不知、莫若不爲。你做的事外邊那一個不說的？你瞞瞞則甚？啗叫你今後仔細些罷了。」

徐徳はある日莫大姐に言つた。「私は人生の半分をあれこれ苦勞して、飯を食えるようになったんだから、體面は守らなきゃいけない、他所の人にばかにされたくないようにしてくれ。」莫大姐は言つた。「どうばかにされるといふのです？」徐徳は言つた。「鐘はたたかなければ鳴らない、鼓は打たなければ響かない、人に知られたくなければ、何もしないに越したことはない。お前がしてゐることを言わない人が他所に一人でもいるか？お前は私を欺いて何をしてゐる？今後は少し慎むがいい。」

ここで夫が妻を咎めてゐるのは、不道徳を責めてのことではなく、外聞を氣にすることである。妻の不義密通を知つても離縁しようともせず、それが公にならないよう妻を諫めてゐる。この發言には、當時の社會的な風潮が反映されてゐるのではないだろうか。不義密通は貞節とは眞逆の罪惡である。不義密通が公になれば、本人はおろか夫や家族にまで累が及ぶ。だからこそ、不義密通が發覺したとき、夫や家

族がそれを處罰しようとせず世間に知られぬように隠し通そうとする可能性は十分に考えられるし、實際にそういう場合も少なからずあつたはずである。

それを裏付けるような場面が『初刻』巻六「酒下酒趙尼媼迷花 機中機賈秀才報怨」にある。尼の手引きで男に襲われた妻が自死しようとするのを、夫は次のように思いとどまらせる。

秀才道「不要短見、此非娘子自肯失身、這裡所遭不幸、娘子立志自明。今若輕身一死、有許多不便。」娘子道「有甚不便也顧不得了。」秀才道「你死了、你娘家與外人都要問緣故。若說了出來、你落得死了醜名難免、抑且我前程罷了。若不說出來、你家裡族人又不肯干休于我、我自身也理不直、冤仇何時而報？」

秀才は言った。「短慮を起こすな、これはお前が自分から身を汚したのでなく、不幸に見舞われたのであつて、お前の固い志は明らかだ。今命を輕んじて死ねば、不都合がたくさんある。」妻は言った。「どんな不都合があつてもかまつていられません。」秀才は言った。「お前が死んだら、お前の實家やよその人は皆理由を尋ねるだろう。話してしまえば、お前は死んでしまつても醜名は免れがたいし、しかも私の前途まで閉ざされてしまう。話さなければ、お前の家の人は私を許そうとしないだろうし、私自身も納得がいかない、恨みはいつ晴らせるというのだ？」

この女性は畏にはめられて襲われたのであつてすすんで不義密通を働いたわけではないし、夫が妻の自死を思いとどまらせようと説得するセリフなので單に世間體を恐れて不義密通を隠し通そうとしているわけではない。しかし自死してもその理由が明らかになれば醜名は免れがたく、夫の將來にも不都合が生じるという發言は、不義密通の事實

を道義的に裁くよりも、黙つて見過ごしておおごとなるのを避けるほうがよいとする意識が社會的に存在したからこそ成立するのではないか。そう考えると、姚滴珠の夫が妾として他の男に圍われていた妻を元通り受け入れることも、莫大姐が不義密通を犯していることに氣づいた夫が離縁しようとしなかったことも、道義的に正しくなくとも、作者や讀者にとつては自然な成り行きだつたと考えられる。

姚滴珠と莫大姐が團圓を迎えた理由は明確に限定できるものではない。しかし上にあげたような複数の共通點を見ると、彼女たちの團圓は決して突飛なものではなく、許容された背景には相應の理由があつたことが見てとれる。

五、他の物語との比較

最後に、「二拍」以外の類似の物語との比較を通し、「二拍」における不義密通の描かれ方の特徴を、改めて考えてみたい。「二拍」に先立つ短編白話小説集、馮夢龍の「三言」の一つ『古今小説』（『喻世明言』巻一）にある「蔣興哥重會珍珠衫」にも、不義密通を犯すが最終的に團圓を迎える「王三巧兒」という女性が描かれている。¹⁹⁾

この物語の主人公蔣興哥は客商で、妻の三巧兒可愛さになかなか出かけられずにいたが、結婚二年後に一年で戻る約束をして旅立つた。ところが病を得るなどして約束通りに歸れなくなつてしまう。

三巧兒は夫の歸りを待ち續けていたが、ある日夫を待ち焦がれて外を見ていたところを新安商人の陳大郎に見られてしまう。陳大郎はその美貌に惚れ込み、知り合いの女を使って家に忍び込んで思いを遂げ、寂しい思いをしていた三巧兒とすっかり深い仲になつてしまった。遂に陳大郎が旅立つ際には、三巧兒が家寶の珍珠衫を持たせて泣く泣く

別れた。

陳大郎は毎日その珍珠衫を身につけていたが、ある日偶然宴席で蔣興哥と一緒にいる。陳大郎が蔣興哥の素性を知らぬまま三巧兒への戀文をことづけたため、二人の關係は蔣興哥の知るところとなつた。

蔣興哥は家に戻るとすぐに三巧兒を實家に送り返し、理由も書かずに去り状を渡して離縁したが、どちらもかつての愛情を忘れることはできなかった。その後三巧兒が役人吳傑の第二夫人にもらわれることになる、蔣興哥は三巧兒の持ち物を嫁入り道具として届けてやつた。

陳大郎もまた三巧兒を思い續け再度訪ねてきたが、その後の事情を知ると病に倒れて死んでしまつた。妻の平氏は驅けつけたものの、金がなく困り果てていたところ縁談を持ちかけられて再婚した。なんとその相手が蔣興哥であつたことが、後に平氏の持ち物の中に珍珠衫があつたことから發覺する。

蔣興哥がまた商賣に出かけると、老人ともみ合いになり、相手がその場で死んでしまつたために訴えられた。その裁きを擔當したのは、三巧兒を第二夫人にした役人吳傑であつた。三巧兒は蔣興哥のことを兄と偽つて無罪にしてもらつたが、不審に思つた吳傑に問われてこれまでの成り行きを全て白状した。相思相愛の二人に感じ入つた吳傑は三巧兒を嫁入り道具と共に返してやり、その後は蔣興哥、平氏、三巧兒の三人で仲良く暮らした。

この物語は、作品の冒頭に

假如你有嬌妻愛妾、別人調戲上了、你心下如何？古人有四句道得好、「人心或可昧、天道不差移。我不淫人婦、人不淫我妻。」看官、則今日我說「珍珠衫」這套詞話。可見果報不爽、好教少年子弟做個榜樣。

許容された不義密通

もしもあなた様にかわいい妻や愛らしい妾がいて、他人がちよつかいを出したら、あなたはどんな氣持ちになりますか？昔の人がいつたうまい四句の言葉で「人心はごまかせるかもしれないが、天道は揺るがない。私が人の妻に手を出さなければ、人も私の妻に手を出さない。」というのがあります。お聞きの方、今日はこの「珍珠衫」のお話をしましょう。因果に誤りのないことがわかりますから、若い方々の見本によいでしょう。

とある通り、明確な教訓を示して語られる因果應報の物語である。蔣興哥の不在中に三巧兒と密通していた陳大郎が、三巧兒の行く末を聞いて驚き病に倒れて死んでしまうというのも、人の妻に手を出した報いだろう。ところが、その相手の三巧兒は大した報いを受けていない。たしかに不義密通を知つた蔣興哥に一度離縁されているが、別れたあとも蔣興哥は三巧兒のことを思い續けているし、再嫁した相手の吳傑も好人物である。彼女がこの二人の男性から厚遇されていたことが、嫁入り道具についての描寫によつて示唆されている。蔣興哥は三巧兒が吳傑と再婚する際に最初に結婚した時の嫁入り道具をそっくり持たせてやり、吳傑が蔣興哥に三巧兒を返すときにも嫁入り道具を持ち歸らせるという描寫がある。この嫁入り道具に關する記述は、三巧兒が二人に大切にされてきたことを示すためのものである。三巧兒は罰らしい罰を受けていないのである。

姚滴珠や莫大姐と三巧兒の不義密通を比較してみると、不義密通が許容された背景に、ある程度普遍的な價值觀が存在したことが見出される。

第一に、冒頭に示された「人の妻に手を出してはいけない」という主題からは先の二つの物語と同じく男性主觀の視點がうかがえるし、

三巧兒の不義密通が夫の長期不在によって引き起こされたものであることも繰り返して述べられている。一年の約束で出かけた蔣興哥が商賣のために歸りを遅らせていることについて、

正是「只爲蠅頭微利、抛却鴛被良緣」興哥雖然想家、到得日久、索性把念頭放慢了。

まったくもって「蠅の頭のように僅かな利のために、鴛鴦の布團の良縁を投げ捨てる」というもの。興哥は家に歸りたかつたものの、到着してから日が立つと、いつそあまり考えなくなっていた。といひ、不義密通の事實を知つた蔣興哥は、

當初夫妻何等恩愛、只爲我貪著蠅頭微利、撇他少年守寡、弄出這場醜來。如今悔之何及。

當初夫婦仲はどれほど良かったことか、私が蠅の頭のような僅かな利を追い求めるためだけに、若いあいつを一人放つて留守番させて、こんなみつともない事態を起こしてしまつた。今更後悔しても及ぶものか。

と、妻を一人残して商賣にかまけていたことを悔いている。

第二に、密通相手との親密さである。最初は騙されたとはいへ、二人はすぐに相思相愛の仲になつてしまふ。ついに別れの時がくると三巧兒は家寶の珍珠衫を贈り、陳大郎がそれを毎日身につけていたという記述は二人の間の情愛の深さを示しているし、三巧兒の行く末を聞いた陳大郎が病に倒れて死んでしまうのも、因果應報の報いという背景はあるものの、直接には三巧兒への思ひの深さゆえである。

第三に、不義密通の事實を表沙汰にしないことである。蔣興哥は不義密通の事實を知り三巧兒を離縁するが、その理由を明かすことはなかつた。

このように、この物語には「二拍」に描かれた二つの不義密通と重なる部分が複数認められ、一見すると「二拍」の物語は蔣興哥の物語の繼承に過ぎないようにも思われる。しかし一方で明らかな違いも見られる。まず、蔣興哥の物語では不義密通を犯した女性とその夫が愛情の力で再び幸せを手に入れるという過程を物語の中心におくが、姚滴珠や莫大姐の話では刑事事件とその裁きの中に女の不義密通を描き入れ、裁きでの申し開きや冤罪を着せた負い目といった合理的な理由付けをしてさり気なく團圓を與えている。凌濛初は不義密通に團圓を與えることに馮夢龍ほど氣負いを見せていないように見える。

つぎに、不義密通に至るまでの女性の心理が姚滴珠と莫大姐のほうがより自然に説明されていることである。大木康氏は蔣興哥の物語について、教戒的意圖と人間心理への興味のバランスがとれている作品であり、貞淑な妻三巧兒が一時的に淫婦に變化し、元に戻つて團圓を迎えるという變化する人間像と、三巧兒の心理の動きに主眼がおかれているとする。こうした變化する人物像は、女が變貌する姿を描いた唐代小説、柳宗元の「河間傳」など文言小説にはあるが、白話小説にはあまり見られないものであつたという。そして文言小説においては心理の變化の過程や理由を説明せずに事實を淡々と描くのに対し、心理の變化を理詰めに説明していくという点に違いが見出だせると指摘する²⁰。しかし特に不義密通に至るまでの設定について見ると、姚滴珠や莫大姐の描寫は蔣興哥の物語よりも更に現實味を増しているように思われる。

「河間傳」では、姑の無理強いに男に犯されようとする時、相手の男の見目のよさに惹かれて心變わりする。三巧兒の場合は夫の不在による孤獨という條件が加わり、夫の不在中に罫にはめられたことがき

っかけて不義密通に陥り、相手の陳大郎と深く愛し合うようになる。そして凌濛初の描く姚滴珠は、夫の不在やごろつきの誘拐だけでなく、舅姑との不仲、ごろつきの家の居心地の良さなど複数の條件によつて心動かされ、莫大姐の場合にも、夫の不在のみならず、夫の愛情の缺如という事實が加えられている。女性が不義密通に走る心理をより自然に描いているといえるのではないだろうか。しかもその不義密通の相手を他の男と對比して愛情を際立たせ、貞と淫を單純に二元論で片付けてしまわないところにも、リアリティへの追求が垣間見える。

そして、不義密通を知つた夫の對處方法も異なる。蔣興哥は不義密通の事實を知ると、その理由が自分の不在にあることを考えて責任を痛感し妻への愛情を残しながらも、有無を言わず離縁してしまう。不義密通はあくまでも罪惡であり、斷固とした姿勢で對處される。しかし姚滴珠の場合裁きが終わると夫は何事もなかつたかのように妻を受け入れるし、莫大姐の不義密通も當初は單に叱責されるだけであつた。不義密通を公にしないという點では共通しているが、實際にはその理由も異なる。蔣興哥の話の場合は妻への愛情によるものであることが明記されていて、『二拍』の莫大姐や『初刻』卷六に描かれたように世間體を氣にしていることではない。

蔣興哥の物語においては、不義密通が悪であることは動かしがたく、一度は倫理的に處斷した上で、夫婦の強い愛情によつてその罪を乗り越えて幸せを手に入れるという一種の純愛物語に仕立てられている。加えてそれぞれの再婚相手の平氏や吳傑もまた深い愛情の持ち主である。三巧兒の不義密通の罪は、彼女をとりまく人々が竝外れた愛情深さや優しさを示すことで許されていく。それに對し、凌濛初の描いた姚滴珠や莫大姐は物語の自然な成り行きによつて、より合理的に團圓

に導かれており、不義密通が目こぼしされる現實に近づいているように感じられる。

しかも、こういった寛容さは小説の中では比較的新しい部類に屬するものであるようだ。先に述べたように姚滴珠・莫大姐の物語には原話が見つかつておらず、凌濛初の自作である可能性も少なくない。蔣興哥の物語には原話があるが、その團圓については馮夢龍自身が付け加えたものとされている⁽²⁾。一方『二拍』には不義密通の結果不幸な結末を迎える女性を描く作品として、『初刻』卷六の入話、卷二十六の正文、卷三十二の正文の三つがあるが、それらはそれぞれ原話の結末を受け継いでいる。こうしたことから、不義密通の結果團圓を迎える女性を描くこと自體新しい試みであるように推測される。

ところで蔣興哥の物語では不義密通の罪を愛の力で乗り越えていく一種の美談を作り上げた馮夢龍であるが、民間歌謡を集めた『山歌』の編纂にあたっては、從來の道德規範から外れたように見える戀愛の歌を數多く収めていて、不義密通の歌も少なくない。たとえば妻の立場から不義密通に氣づかぬ夫を嘲る次のような歌がある。

瞞夫

急水灘頭下斷簾

又張蟹了又張鰻

有福箇情哥弗知喫子阿奴箇多少團臍蟹

我箇親夫弗知喫子阿奴奴多少鰻

夫の目をくらます

早瀬に梁をかけて

蟹を待ち望み、また鰻を待ち望む

運のよい兄さん、どれだけわたしというめすがにを食べたか知れ

ないわね

そしてうちの亭主は、わたしからどれだけうなぎを食べさせられたか知れないわ(鰻は臍に通ずる。どれだけあざむかれたか知れない)

ここには不義密通を罪惡として悔いたり恥じたりする姿勢はなく、むしろ樂しげな雰圍氣が漂っているように見える。小説においては不義密通は斷罪されるのが普通であつたが、ここにはよりあけすけな女性の姿が記録されているのである。類似の歌が『山歌』にはたくさん收められており、『山歌』に登場するような身分の人々の間には、知識人たちが聲高に貞節を尊んでいるのとはずいぶん異なる雰圍氣が醸成されていたことがうかがえる。馮夢龍も編纂にあつてこうした歌を排除せず、ありのままの姿を記録している。

凌濛初は同様の試みを小説で行つたのではないだろうか。姚滴珠や莫大姐は『山歌』に見える人々と同じとはいえないかもしれないが、いずれも庶民的な家庭で暮らす。姚滴珠の夫は客商をして稼ぎ、莫大姐の夫は役所で用人をしている。不義密通を絶對惡とする知識人的な理想と、社會構成の大多數を占める庶民たちの現實には少なからず差異があつた。姚滴珠や莫大姐の物語は、凌濛初がそうした庶民的な女性の姿を小説の中に寫し取ろうとした結果なのかもしれない。

おわり

あからさまな不義密通を犯した女性が不幸な結末を迎えないという「姚滴珠」と「莫大姐」の物語は、白話小説における不義密通の描かれ方を考えると些か不可解な作品である。

物語の内容から、男性の視點から社會を律しようとする姿勢や女性

の一途さを評價する風潮、貞節を重んじる理想と現實の間の乖離などが背景にあることが垣間見えた。類似の傾向は先行作品である馮夢龍の「三言」中の作品にも見出すことができ、ある程度普遍的な價值觀を反映したものであると推測される。しかし馮夢龍が夫婦が自身と周圍の人々の深い愛情によつて不義密通を乗り越え、なんとか團圓にこぎつけるという特殊な例外として描いたのに對し、凌濛初の作品からは、不義密通を咎めないことを當然とするかのような氣負わぬ姿勢が見られ、より現實に近い女性や不義密通を描こうとしていたように感じられる。世間一般で惡事とみなされることを單純に非難するのではなく、現實に照らし合わせて客觀的に物事を見つめようとする姿勢の表れと言えるのではないだろうか。

「二拍」には、女性の不義密通に限らず、様々な惡事を描いた作品が多い。それらの描かれ方についても検討することで、凌濛初の價值觀をより深く知ることができるようになる。それらについては今後の課題としたい。

注

- (1) 合山究「節婦烈女―明清時代の女性の生き方」(『明清時代の女性と文學』汲古書院、二〇〇六年。初出は『中國―社會と文化』十三、一九九八年)。
- (2) 吳秀華「明末清初戲曲中女性形象的貞操觀念」(『明末清初小説戲曲中の女性形象研究』、江蘇古籍出版社、二〇〇二年)。
- (3) 曹亦冰「從「二拍」的女性形象看明代後期女性文化的演變」(張宏生編『明清文學與性別研究』、江蘇古籍出版社、二〇〇二年)。
- (4) 趙紅娟「別出心裁『兩拍』問世」(『拍案驚奇―凌濛初傳―』、浙江人

民出版社、二〇〇七年)。

(5) 山口建治「『拍案驚奇』に描かれた女性―聞蜚蛾の場合―」(『人文研究』八八、一九八四年)。

(6) 傳承洲「凌濛初及其『二拍』」(『明清文人話本研究』、人民文學出版社、二〇〇九年)。

(7) 小川陽一「『三言二拍』本論考集成」、新興社、一九八一年。

(8) 尙、テキストについては全て『小説三言二拍』(ゆまに書房、一九八五・一九八六年)を用いた。

(9) 林雅清「淫婦」の結末―『水滸傳』における不義の扱いについて―(『關西大學中國文學會紀要』三三、二〇一二年)。

(10) 小川陽一「姦通はなぜ罪悪か―三言二拍のばあい―」(『集刊東洋學』二九、一九七三年)。

(11) 五味知子「『貞節』が問われるとき―『問心一隅』に見る知縣の裁判を中心に」(『中國女性史研究』十七、二〇〇八年)。

(12) 合山究「節婦烈女の異相―貞節と淫蕩のせめぎ合い―」(注(1)参照、初出は『中國古典研究』四六、二〇〇一年)、「節婦烈女の多様化と節烈觀の變容」(注(1)参照)。

(13) 仙石知子「孝と貞節」(『明清小説における女性像の研究―族譜による分析を中心に』、汲古書院、二〇一一年。初出は『東アジアにおける「家」―傳統文化と現代社會―、大東文化大學、二〇〇八年、原題「中國女性史における孝と貞節―近世譜にあらわれた女性觀を中心に」)。

(14) 『二刻』卷十一「滿少卿饑附飽颯 焦文姬生離死報」に、女性が再嫁すると貞節を失ったと非難されるのに、男性は再婚したり、妻が生きているうちから妓樓に通ったり娼妓を圍ったりと好き放題できるのは、女性からは納得できないことであると男女の不平等を指摘する記述がある。原文は「却又一件天下事有好些不平的所在。假如男人死了女人再嫁、便

道是失了節、玷了名、污了身子、是個行不得的事、萬口訾議。及至男人家喪了妻子、却又憑他續弦再娶、置妾買婢、做出若干的勾當、把死的丟在腦後不提起了、竝沒人道他薄倖負心、做一場說話。就是生前房室之中、女人少有外情、便是老大的醜事、人世羞言。及至男人家撇了妻子、貪淫好色、宿娼養妓、無所不爲、縱有議論不是的、不爲十分大害。所以女子愈加可憐、男子愈加放肆、這些也是伏不得女娘們心裏的所在。」

(15) 大木康「明末における白話小説の作者と讀者について」(『明代史研究』十二、一九八四年)。

(16) 馬美信「『兩拍』的藝術特色」(『凌濛初二拍』、上海古籍出版社、一九九四年)。

(17) 合山究「情」の思想―明清文人の世界觀(前掲書、初出は福井文雅博士古稀記念論集『アジア文化の思想と儀禮』、春秋社、二〇〇五年)。

(18) 鄭培凱「天地正義僅見於婦女・明清的情色意識與貞淫問題(續完)」(『中國婦女史論集第四集』、稻鄉出版社、一九九五年。初出は『當代』十七、一九八七年)。

(19) 二つの物語に類似性があることは吳秀華前掲書にも指摘があり、姚滴珠も王三巧も騙されたとはいえかなり積極的に不義密通に走っているにもかかわらず、作中の男性主人公たちが彼女たちを大して責めていないという共通点が述べられている。

(20) 大木康「古今小説」卷一「蔣與哥重會珍珠衫」について(『和田博徳教授古稀記念 明清時代の法と社會』、汲古書院、一九九三年)。

(21) 仙石知子「明清小説における女性像と族譜」(注(12)参照)。

(22) 原話の存在については注(7)参照。

(23) 原文、譯ともに大木康『馮夢龍『山歌』の研究 中國明代の通俗歌謠』、勁草書房、二〇〇三年、第二部譯注編卷一私情四句(25)、四二九頁。